

朝海浩一郎日記抄(2・完)

SHIRATORI, Junichiro / 朝海, 和夫 / 河野, 康子 / 村上,
友章 / 井上, 正也 / 白鳥, 潤一郎 / ASAKAI, Kazuo /
KOUNO, Yasuko / MURAKAMI, Tomoaki / INOUE, Masaya

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Review of law and political sciences / 法学志林

(巻 / Volume)

112

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

92

(発行年 / Year)

2015-01-27

資料

朝海浩一郎日記抄(二・完)

翻刻 朝海 和夫(立命館大学)

翻刻協力 「朝海浩一郎日記」研究会

河野 康子(法政大学)

村上 友章(立命館大学)

井上 正也(香川大学)

白鳥潤一郎(北海道大学)

一九四〇年八月二日【外務省の大規模人事異動】

一九四〇年八月二四日

本省の幹部もすっかり変わるらしい(中略) 大体大橋(次官)人事なるものの背後も予想される。それは所謂革新派の全面的台頭である。【大橋外務次官・松岡洋介によって次官に抜擢されたと言われる。】

一九四〇年八月二七日【父嘉吉郎の死去】

一九四〇年一〇月二七日〜十一月二日【上海、南京出張】

朝海浩一郎日記抄(二・完)(河野)

一九四〇年一〇月二七日

一般が支那渡航に重大な制限を受けている関係上官吏はその身分と渡航の事由とを証明しなければならぬ。外務大臣の「公用により支那に出張、右証明す」と云う証明書が必要である。日本金は全部軍票に取り替えなければならぬ。昔は連絡船の一等船客は相当品の良い人ばかりであったが此の船、そして恐らくは最近の連絡船は然らず。船中、食堂でもデッキでもスリッパはほぼ例外なし。中にはドテラでスモーキングに現れた豪の者もあった。此の船は日本船でしかも日本の勢力範囲を航行しているのであるから勝手な格好で構はぬ、西洋流儀に拘る必要はないと云ふかも知れないが食堂なり公の場で身装を整えていることは決して西洋流儀に則っているからではない。船の食事もまづくなつた。食堂なり部屋付きのボーイのサービスの悪くなつたことも驚くばかり。昔の一等船客に対する待遇ではない。

一九四〇年一〇月二八日【上海で買い物】

此処は綿製品その他が豊富に供給されているので日本で手に入らぬ品物が高いけれども幾らでも手に入る。立派なバスが間断なく走り、着飾った支那人、欧米人が忙しげに行き来している中をみすばらしい苦力が駆け回っている。戦争から独立した「化け物上海」である。物資不足の日本を尻目に、ここではカ

ネさへ在れば何でも手に入る。軍票は法幣に一对一・五の優位にあるが日本の物資が豊富で自然に価値付けされているのではない(中略)、内地で食うものも食わず着るものも省いて中支での軍票価値維持に努力している。

一九四〇年一〇月三〇日【蘇州】

領事館の事務所に行く。ここは事変後某支那富豪の住宅を接収したものださうだが立派なものである。庭園は北京の萬寿山を模したものださうで石船さえもある。

一九四〇年一〇月三十一日【南京】

外交部に周隆痒君を訪ねた。周君は次長になっている。非常に気持ちよく色々話した。要するに日本側の信頼といふことが自分達として今直ぐ期待したい処のもので之がなければ食料政策も新政策の保安隊の組織も行い得ない、といふ話を力説していた。南京も昔と大分相違している。最近は随分落ち着いてそうだがまだゴタゴタしているし住民も半分しか復帰して居らぬ。交通部の破壊振りと目ぼしい建物を全部日本軍で使用していることも著しいことの一つであらう。昔の味わいのある南京ではない。

一九四〇年十二月一日【弟秀次郎入営、十二月一〇日芝浦から乗船】

一九四〇年二月六日【新設された内閣情報局の第一課長に発令】

一九四〇年十二月三十一日【一年の回顧】

昭和一五年は恐らく最も自分にとり忘れることの出来ぬ年(中略)紀元二千六百年の忘れ得ぬ印象深い感激に富んだ祝典(中略)支那事変三年目、欧州戦線に年目の混沌たる年でもあったし内政的には翼賛運動の具体化した年でもある。父の死(中略)秀次郎の入営(中略)外務省の未曾有の誠首も此の年に行はれた。相当省内不愉快な空気も在り情報局に転官したことを寧ろ喜んでいたのである。

一九四一年一月十七日【外務省調査部第五課長】

一九四一年一月一八日

自分の情報局一ヶ年の生活は全く愉快であった。外務省とは決定的に縁を切って煩わしさから逃れていた。この点は多少消極に失したかもしれないがあまり積極的に進出する気分も出なかった。二課の仕事は極めて愉快であったし、人の和も得ていたし雑務に追われて目の回るほど忙しいといふこともなかった。やった仕事としては、交戦国の本邦内における宣伝取り締まりの問題でこれは自分が情報局に来ると直ちに立案し、その後行

余曲折もあつたが最近ようやく取り締まることとなり成功裏に問題は解決を告げかけて来ているが、これが一番大きなそして仕事らしい仕事であつた。情報局にいる間なんといつても一番経験を積んだのは講演であつた。月に平均五、六回はしゃべっていたからこの方はすっかり慣れて人前で話することは平氣となつた。

一九四一年二月七日

今日は日曜だが出勤した。対米最終的な回答やら対タイ進駐要求の発出やらで外務省はごった返している。いろいろ連絡に追われて午後一二時近く帰宅。二六〇〇年の歴史を睹した大戦争の幕開き前としては、なんとも静かな夜であらう。十七夜の月がぼんやりと空に浮かんで、街を走る電車も忙しげな歳末の人の顔も、緊迫した国際情勢を知らぬ気である。明日手交せられるであらう在京英米大使への「戦争状態に入った」旨の布告文も見た。覚悟はしていたがそれはちょっと信じられないような破局である。皇国の前途に万感をはせながら重苦しい気持ちで帰宅した自分であつた。この夜、南方駐在の使節、領事官等に対しても、事ついにここにいたり諸官と諸官の〇〇する居留民を保護するの絆は断ち切られるに至つた、異境にあつて奮闘する者に思いを致せば胸迫るものがあるがよく最善を尽くせよ、といふ悲痛なる大臣の電報が発出せられた。

朝海浩一郎日記抄(二・完)(河野)

一九四一年二月八日。役所に駆けつけるとすでに堀第三部長が内外の新聞記者を集めて対米交渉の経過を発表している。豪州記者のカトーが来ていたが気の毒な背広姿であつた。この発表文を受け取つても彼は本国にこれを打電し得ない。しかも数時間後にはこの老人はキャンプに收容されることとなるのである。宣戦布告の通告文を手交すべく英(太田)、米(大野)、〇〇(柿坪)、カナダ(自分)が派遣されることとなり、種々打ち合わせを遂げた上警視庁に勢ぞろいし各班とも警察官、憲兵、通信省係官を引率してそれぞれ各大公使館に向かつた。赤坂表町のカナダ公使館はすでに警察官により嚴重に警戒せられておる。代理公使のグリアに面会を求め彼の居室で戦争状態に入つた旨を述べたところ彼は非常に驚いたような面持ちで *my country, too* と述べたのには自分の方でちょっと驚かされた。懸案の短波無線は極めて簡単に引き渡してくれ、ちょっと気まずかつた官邸と事務所の家捜しも終わり、一時近くに連絡員を残して引き上げた。警視庁で大詔の渙発せられるのを聞いてから直ちに赴いたのでこの間一時間半ぐらひであつたらうか。カナダの公使館では今日は米國大使を晚餐に招待していたらしい。午後三時大臣が省員全部を前庭に集合し詔勅の奉戴式を挙行、一同「君が代」を歌い宮城を遙拝してから大臣が、「天佑を保有し(中略)」奉読したがさすがに大臣の頬は青白く、声も興奮を認められた事は当然である。満場寂として声なく、いづれも重大事局に直面しての決意を眉意に浮かべた。奉読後、

大臣から相当長い訓示があった。今日は室内の配置変更やら何やらで大混雑、てんてこまいをした。

一九四二年二月八日

大東亜戦争勃発一周年記念日である。昨年の今日、思えば身体は今更ながらに引き緊るものを覚える。今まで鬱積した気持ちが一時に晴れ晴れとした感じであった。正午、広場に全省員が集合し大臣が御詔勅を奉読し訓示あり。聖戦貫徹の意気を新たに示して二〇分で式を終える。

一九四二年二月三日

一九四二年を送る。大東亜戦争第二年目、マニラ、シンガポールの陥落からラングーンを制定しジャワを攻略して向かうところ敵のなかった皇軍は、ガダルカナルの敵と相対して戦争はやうやく深刻化して第三年目を迎えんとする。今年は公的には多事の年の一であらうが私的には比較的平穏な年で大した変化もなかった。自分の夏のタイ行き、一月に調査部第五課長から大東亜省設置に関連する機構の改革で通商一課に移った。これらが大きな出来事であって家族にもなんらの異動なし。一時、秀次郎が帰ってきてまた出征したぐらいのものである。一九四二年を送り多幸なるべき一九四三年を期待することとしたい。

一九四三年六月五日

山本元帥国葬の日である。六時半の列車で東京に行く。七時四五分役所に勢揃いし沿道に堵列する。外務省の場所は丁度行列が右折する曲がり角(内幸町通り)であった。自分は最前列に出たので葬列を充分に拝し得た。儀仗兵の馬の鼻面が目の前に来た程であった。元帥海軍大將正三位大勲位功一級山本五十六の弔旗に続いた砲車に載せられた元帥の遺骨が目映って思わず涙が込み上げて来た。約千メートルに及ぶ葬列であったが軍楽隊の奏する「命を捨てて」の悲曲が葬列が去った後もいつまでも耳に残った。誠に悲しい日であった。一時二〇分日比谷の斎場で拝礼をした。

一九四三年七月一日

イタリーのムソリーニ首相が桂冠したとの報を耳にした。公電は未だこぬ。発電は差し止められているらしい(中略)。今更にあっけないのに全世界呆然たりの観がある。皇帝の布告文も米英徹底抗戦の気魄に欠けるがごとくで頼りない。

一九四三年九月九日

今日、役所に行つて机の上の「ショートウェーブ」を取り上げたならばイタリーの無条件降伏に関する敵の声明とバドリオの公式発表であった(中略)。無条件降伏から一步進んで敵方への参戦となつたことは一寸意外であった。

一九四三年一月三日【上海出張】

一二時半福岡発四時半頃上海着。夕食後店を覗いて見たが、上海は怪物の本領を発揮して品物は何でもある。ただ途方もなく高い（中略）。泰や仏印では日本で得難かった品が安価に手に入ったが、靴が日本金で一〇〇円も一五〇円もしてはつまらぬ（中略）。

北京、天津（秀次郎出迎え）、釜山を経て帰国。

一九四三年一月二七日

釜山から連絡船、一〇時出帆、窓にはカーテンをおろして真っ暗である。一一時頃乗客は浮き袋をつけて避難訓練をやる（中略）この航路でも最近崑崙丸がやられたので皆緊張している（中略）。

一九四三年一月二三日【大東亜会議…王精衛南京国民政府行政長、張景惠満州国総理、ラウレル・フィリピン大統領、パーモ・ビルマ総理、ボース自由インド仮政府首班、ワンワイ・タ親王（中略）】

王の演説は普通、ワンワイ殿下は極めて低調、張景惠…この爺さんが又書いてもらったものを何のこなしに読んでいるといふだけの話で少しの張りも迫力もない。議場は全くダレてしまった。（中略）ラウレルは原稿なしの堂々たる演説をやり議場初めて緊張し私語は止みいずれも緊張せる面持ちを代表に集

中した。パーモ…英語で半分原稿に頼る程度でこれ又堂々たる

演説（中略）ラウレルに比し演説の態度やら遣り口やらは少しく落ちるがその英文が充分に練られた原稿であることがラウレルに勝る（中略）ボースの演説はラウレルのごとき派手なジュスチャーはなくパーモの如き美辞はないにしてもその態度の示すが如く極めて真面目で人の好感を惹く話ぶりである。第一日の採点…ラウレルとパーモは甲乙なくこれを一〇〇点とすれば日支代表は夫々六〇点、タイ・満州国代表は夫々二〇点で落第である。

第二日目、ボース…大東亜戦争に於けるインドの決意を述べ（中略）最後の勝利は確信するが前途の困難を決して過小に見積もるものではない、いま自分がこうして話をしている間にも我々の同志はデリーへの進軍を見ずして屍を曝して居る、然し男子一度起てり生死又何するものぞ、と論じたとき感極まってボースは言葉が出なくなった。

ビボン首相は遂に來らずワンワイをして代理せしめたものであるがワンワイ一行の態度も時間が与えられているから仕方がない、一応演説をやってお茶を濁さう、と極めて消極的であり本国政府のこの会議に対する気持ちを如実に反映していて自分たち接待している者にも張り合いがなかった。

一九四三年一月九日

第二次ブーゲンビル沖航空戦の大戦果がラジオで発表されて

いる（中略）我海軍は戦艦四隻を撃沈破し巡駆艦一一隻以上をも撃沈破して正に真珠湾以来の成績を上げた。溜飲の下がる気持ちがある。

一九四三年二月一日

海軍の森下と将校集会所で夜食、色々の話を聞いた。戦局は重大である。

一九四三年二月四日

出淵勝君（注、義弟）に召集令状（中略）丁度新宅の日本間が新成したばかりであるがこれを使う間もなく忙しい出征である。新婚の夢もまだ覚めやらぬ（中略）隣組にアメリカ婦人日本人に結婚したといふ相当年配の人がいるが子供とともに九品仏まで送って来てくれた。隣人の唯一の子息が自分の同種族と戦ふため新婚の夢を振り切って入宮する（中略）この婦人の眼には感に堪へ兼ねて涙が光っていた。

一九四三年二月二六日

この辺で本年の回顧をしてみよう。今年が決戦第二年目日本としては全く重大なそして多端な日を迎え且つ送った、と言へよう。敵の反攻は漸く熾烈となりガダルカナル、ムンダに於いて又ブーゲンビル、ギルバートに於いて我が方は戦果はおさめたが戦局は押され気味であったし、この間山本元帥の戦死も

あった。一方において反枢軸軍は北阿に於いて独伊軍を圧倒し去り次いで南伊に上陸して脆くも伊国の降伏となってしまった。かくして〇〇なる戦局の裡に一九四三年は暮れんとしている。一九四四年にはこの類勢を何処かで挽回する決意を新にせねばならぬ。

個人の生活上はこの年は比較的变化の少なかった年と言えようか。

その他大東亜会議も〇〇な思い出であったし、支那出張も久しぶりの外国行きとして一応記録しておく必要がある。一〇月、機構の簡素化が又政府の問題となり外務省としては通商局の廃止と書記官の定員減少が取り上げられたので、これは愈々転出かな、と思はされたこともあったが結局通商局は戦時経済局と名称変更されたに過ぎず自分の地位も同局の課長とあって依然東京勤務が続くこととなったのは好都合である。

今年には御用納めもなく年末一杯働いて正月三日間休むのみである。

一九四四年三月四日

今度の内閣の決定で芸妓、待合等は一年間休業となり明日から効力を生ずるので今日は最後の日であるが「金田中」で首藤氏がウォルタートを呼んだのに陪席。芸者もそわそわ落ち着かず待ち合いの内儀も感慨深げの様子であった。

一九四四年三月二日

午後役所で驚くべき凶報を聞く。「令弟朝海少尉今二日発疹チフスにて死亡せられたり」といふので頭がガンとした。

一九四四年三月二六日

母、秀次郎のあとを追って本日午後三時一五分永眠。

一九四四年五月三〇日

新潟より朝鮮、満州、中国に出張・新潟、羅津、牡丹江、ハルビン（午前中買い物をやうとしたが何も無い。最近満人の買い漁りが甚だしくて繊維製品の如きは全部販売を停止していた。百貨店に入ったが堂々たる店に並べられた商品のなんと対比的に貧弱であり、また、配給品のため列を作っていた露人の姿の何とみすばらしかったことか。）、撫順、京城、下関、奈良、東京着六月二四日。

一九四四年七月六日

戦局面白からず。サイパンもついに絶望の状態となった。

一九四四年一〇月一八日

台湾沖大海戦は素晴らしい戦果で、久しぶりにモヤモヤした空気が一扫されたような気がして嬉しかった。

一九四四年一〇月二八日

台湾沖の海戦に続いて比島沖海戦の戦果が発表された。愉快である。ただし、レイテ島に上陸した敵兵力は侮りがたく、これを追い落とさなければ折角の戦果は戦局を左右するに至らざることブーゲンビル海戦の例と同じとなる。戦局は愈々決戦の様相を備えて来たと言はねばならぬ。

一九四四年一月一日

午後一時ごろ銀座を散歩していたら突如空襲警報が発令されて驚かされた。見上げた頭上には高く飛行機雲を曳いて敵機の巨姿が浮かんで見えた。投弾はせず偵察を目的としたものらしい。

一九四四年一月二四日

午前一時五〇分ごろから空襲警報発令され、敵機約七〇が数梯団に分かれて帝都に侵入、投弾した。快晴の秋空に飛行機雲をひいて高々度の敵機が銀色に光りながら飛んでいる姿は誠に憎らしいものである。空襲警報は三時過ぎ解除、幸い被害は大したものではないらしい。

一九四四年二月一四日

局長に呼ばれた。上海大使館勤務を勧められる。土田（註）、公使、大正一一年）、佐藤慎太郎（註、参事官、大正一四年）

両氏の下で働くわけである。考へさせてくれとて一旦引き下がる。局長の留任と共に自分も東京勤務は動くまいと考へていた際であるだけに意外であった。来るものが来たような気がしないでもない。東京勤務八年間、家庭を中心に愉快に仕事をし、最近は何気ずぎるようにもったいない生活をしていただけに單身海外勤務は自信がない。

一九四四年二月三一日

今年の日記帳冒頭において「今年こそいかなる内容を持った年であらうか、多事多難が予想されるのである」と書いているが誠に多事多難の年であった。大東亜戦争は第四年目に突入先として、戦局はいよいよ深刻。敵はマーシャルからサイパン、〇〇と侵攻しきたり遂に比島を中心とする激戦が展開せらるるに至っている。自分の私生活を顧みるも本年ほど多事な年は少なかったであらう。まず三月二一日と二六日と相次いで母と弟を失った。殊に弟の死がまったく意外であった。その間、自分の満州旅行もあった。そして年末ついに自分の転任が決定してしまつたのである。東京勤務連続八年半のこともあり外国勤務もやむを得ないが、但避け得られたであらう外国勤務であったことが心残りである。今年は何年でも殊に年末の感じはしない。街頭の景も又然り。ラジオも昨年のごとく遅くまで一九四四年を偲ぶことはない。空襲下の年末は又大東亜戦争始まって以来日本人の最初の〇〇である。さらば一九四四年。そして昭

和二〇年が日本国にとり又自分にとり希望に満ちた年であることを祈念するのみである。

一九四六年三月【終戦中央事務局総務課長】

一九四六年八月【同総務部長】

【終戦連絡中央事務局は外務省の外局で日本政府とGHQの連絡窓口…一九四五年八月〜四八年一月まで設けられていた】

一九四七年一月一日

【自分の病氣、大東亜戦争の終末期等の理由から一九四五年春から】日記をつける気力もなく、中断していたが現在の仕事には張り合いがある、戦争中及び戦争終了後の食料不安も大分改善された。昭和二年は（中略）暗い年とは思はない。経済的には前途は思わしくないが日本が更生の第一歩を踏み出した年（中略）これが日記を再びつけ出した所以である。

一九四七年四月二二日第一回参議院選挙に岳父出淵勝次当選。

【一九三六年に貴族院議員に勅選されていた】

一九四七年八月一九日出淵勝次死去。

一九四七年二月三〇日外務省総務局長に内定（発令は四八年一月三一日）。

【外務省で研究していた講和条約案がプレスにリークしたため外務省幹部数名の引責辞職に関連】。

一九四七年二月三日（二年の回顧）

大きなニュースは①出淵父の死②社会党内閣の成立③終連の解消④年末に総務局長に就任等であった。社会党内閣が成立したことは日本の政治にとり画期的であるばかりでなく、これを契機として終連、殊に自分が完全に枢機から離れて浮かび上がった。

【社会党片山内閣は一九四七年五月～四八年五月、四七年九月頃から終連の解消が取り沙汰されていた】。

一九四八年五月二日

今日からサマータイム（中略）大賛成（中略）議論ばかりしていたがやっと実行に移した。

一九四八年一月一日～連絡調整局長官（兼内閣官房次長）に任命。

【第二次吉田内閣…連調は終連の後身で日本政府とGHQとの連絡・調整を担当】。

一九四八年二月二五日

【少数与党の吉田内閣はなるべく早く解散して総選挙を行い

朝海浩一郎日記抄（二・完）（河野）

多数を獲得したかったが野党は逆に、解散を阻止しなかった。曲折の結果、二月二十八日に「総司令部当局の斡旋により」（『吉田茂回顧録』第一巻 p.15）追加予算案成立後野党が内閣不信任案を出して解散、といふ与野党合意が成立した。】

何しろ少数党でありながら議会を切り抜け不信任案を出させて解散しやうとするのであるから（中略）多数党のマーシーの下にあらざるを得ず、これを乗り切るには総司令部のテコ入れ以外には道がない。このテコ入れに対し多数党の方からまた工作が総司令部に対して行われる。それだけに渉外事務も多忙を極めた。四時、五時まで仕事がなく夕方から深更にかけて忙しくなる（中略）徹夜か徹夜に近い。

一九四八年二月三日

（二年を振り返る）…今年は極めて平穏な年であった（中略）二月に終連の解体とともに外務省の総務局長となり、吉沢次官と気持ちよく仕事をして一〇月に及んだが急に昭電疑獄で片山内閣の倒壊となり第二次吉田内閣が成立し自分はその内閣の官房次長兼連調局長官を頼まれた。然し官房次長の方は考えた末辞退し連調に長官として臨む事を引き受けた（中略）局面は大分政治的になって来たが仕事の性質は昔と異ならず慣れたもの（中略）但議会中の気苦労は別であった。

一九四九年二月一六日

【第三次吉田内閣成立】

新内閣は（中略）前回の組閣とは異なり連調長官は殆ど利用せられず自分も田村町の事務所執務した程であった。

一九四九年三月からジュネーブで開かれた、戦地軍隊に於ける傷者の扱い等に関する条約などの審議に参加するGHQの代表団の顧問として会議にオブザーヴァー参加。政治的、外交的會議に日本がオブザーヴァーながら参加するのは初めて。（昭和二年一月に刊行された『外交の黎明』（読売新聞社）も参照。

一九四九年四月一二日羽田発、上海着…（中略）支那の旅券係と税関のかなり長い検査（中略）旅券は受取証と引き換えに取り上げられ明朝飛行機出発前に渡すと言はれた事が他の米国人旅客と相違した点であった。ホテルに向かう道筋の光景は昔と少しも変わらない。中共が南京の対岸に現れても、中国に大きな変化が起ころうとしても、外見的には昼の上海の顔には少しの変化も見られない。新聞社の前、「和平か渡河作戦か」と書いた新聞記事に立ち止まっている人は少ない。旧日本総領事館付近を散歩する（中略）感無量である（中略）北四川路の日本人権益地区を歩いた（中略）（外国を歩いてみると、いかに日本がおろかな戦争を行い、在留邦人が宮々辛苦して蓄積した財産（事変で強奪した権益ではない）を根こそぎ失ったか、

が判る」…『外交の黎明』ホテルに滞在客は少ないのか食堂は我々一行とバンナムの同行客が四、五名（中略）インフレ（中略）一行五名の夕食代は六〇万ドル（中略）上海は大きく変化しているやうである。外国勢力、殊に英国の影響が眼に見えて薄らいている。米國勢力は少なくとも外見的には英国の勢力に比べて代はっているようには見えない。

一九四九年四月一三日香港着…九龍のホテルは何処も一杯で上海とは著しい対照。

一九四九年四月一四日【バンコック經由カルカッタ着…貧民街、靴磨きの子供（中略）イラク行き査証は日本人には発給されなかったのでカルカッタに足止め（中略）】金なしでカルカッタに足止めされたのでは何とも措置のとりやうがない。昔ならば此処は日本の総領事館の所在地であったが国力を失った日本人としては心細きこと限りがない。

一九四九年四月一九日【米側の口添えて査証が取れたのでカラチに向けて出発、税関吏の友好的態度】日本は戦争中東亜に於いて数々の悪名を残したけれども、戦争前、日本がいまだ思いつからぬ昔の時代に、私達の先人はインドやパキスタンの人々の心に何等か印象を残すやうな善行を行っていたのかも知れない。

一九四九年四月二〇日【カラチ発バスラ、ダマスカス、イスラ
ンポール經由ブラッセル着】

一九四九年四月二二日【ブラッセル発汽車でジュネーヴへ、四
月二五日から会議】

一九四九年五月二日イタリーの代表が捕虜の待遇問題で自分の
二カ年の日本抑留生活云々を論じ、まるでこの国が過般の戦争
で当初から民主国家とともに枢軸国家に対抗していたような印
象を与えた。この国の代表の厚かましさに別に憤る必要はない。
ただ日本がこんな国と真面目に生死共にする盟約関係に入って
倒れた自分自身の愚かさに憤りと悲しみを深くする。英国代表
の立論、胸に訴える発言に感心(中略)「インド代表の司会ぶ
りを見ながら、現在の日本には果たしてこういふ席でこの程度
に議長を勤め得る人が何人あるだろうかと感慨無量だった。我
が国では、国際会議に経験を持った人は既に老年か或は引退し
ており(中略)若い人の養成は急務」(『外交の黎明』p76)
会議に参加したGHQの代表は七月三日の記者会見で(「中
略」)会議の空気及び旅行中の接触によってハッキリした事は、
日本の戦争中における行動はまだ忘れられておらず、日本が国
際社会へ復帰するには努力を要するといふ事であった」と述
べている(『外交の黎明』p95)。

朝海浩一郎日記抄(二・完)(河野)

一九四九年五月二九日【ジュネーヴ発、汽車でバーゼル、カー
ルスルーエ等經由フランクフルト泊、ドイツの戦争被害に強い
印象】建物は(中略)瓦礫となって山積(中略)痛ましく又醜
く(中略)。

一九四九年五月三一日ケルン…徹底した破壊(中略)崩れ落ち
た壁や焼け残った建物が青空に奇妙に聳へているのみで一人
通らない。この廃墟とコントラストをなして殆ど損害のないカ
シードラルが立っている。中に入ってみるとパイプオルガンの
音が聞こえて、キリストの像には赤々と灯明が上げられ二、三
人熱心にその前に跪いて祈っている。失われんとするケルンの
人の魂に勇気と力を与える有り難い存在であるように思われた。
ホテルの食事貧弱(略)昔のドイツ料理の面影はない。給仕が
ホワイトタイをつけているがそのサーヴする料理に比し余りに
もそぐわないで寧ろ滑稽である。少量なまずい食べ物も勿体ら
しくついで客にサーヴする。

一九四九年六月一日ケルン発汽車でブラッセル着、六月二日飛
行機でロンドン着(二〇年ぶり)…貧弱な食事、みすばらしい
服装、耐乏生活(レストランの食事は五シリングを上限として
統制)：

一九四九年六月三日…昔何となく一目置けた英国人が、当方が
敗戦国民であるに拘らず同等的に見える。今や英国は中流の下

位（中略）努力はしているが到底昔の隆盛を取り戻すことは困難と見る。旧大使公邸など視察（中略）街には爆撃の跡があるが、いずれも局部的で大した事はない。

一九四九年六月四日ロンドン発汽車でエディンバラへ、留学時代の教授達を訪問。

一九四九年六月六日ロンドン帰着。

一九四九年六月八日ロンドン発シャノン（アイルランド）經由ニューヨークへ、初めての訪米。

一九四九年六月九日「初めてテレヴィジョンを見た。縦一尺、横一尺五寸ぐらゐのスペースに写真が出てくる」『外交の黎明』p178)。

一九四九年六月一三日ニューヨーク発ワシントンへ…議会見学、プロ野球見物、旧大使館前通行…米國に日本の知己多し。目下米國との間に外交関係はないけれども、日本に関する紹介は全米に散らばったこうした人たちによって不斷に行われていることは誠に心強い。」『外交の黎明』p186)

一九四九年六月一七日【ワシントン発シカゴへ】ニッケルを機

械に入れるとポトリと入れ物が落ちてそこへ自然と一定量のコカcolaが注がれる。荷物は同じくニッケルを入れると箱があいて鍵をして鍵だけ持って帰る。何でも簡単である。

一九四九年六月一八日、シカゴ発ソルトレークシティー着、GHQの知己を訪問。

一九四九年六月二〇日、サンフランシスコ着、日系人グループと懇談、スタンフォード大学訪問。

一九四九年六月二三日、サンフランシスコ発ウエーキ島經由二六日羽田着。

「日本は小國の地位に転落した。然し日本が小國になればなるほど、われわれの國際情勢に対する関心は大でなければならぬ。」『外交の黎明』p3)

一九四九年二月三二日（二年を回顧）…（略）総選挙は一月民自党の圧倒的勝利に終わり、安定したかに見へた。ところがこの多数を背景とした政府は行政整理に取りかかり、連調の廃止といふ全く思いがけぬ事態が生じて来た。大磯通いもした。第三次吉田内閣の成立にあたっては自分とGSの線は全く無視せられ連調は事実上二、三月の頃には消滅するように措置されていた。寿府出張（中略）自分の外遊は大々的に報道（略）

『外交の黎明』といふ本も出版（中略）外遊中に連調は廃止せられ（中略）自分は研修所指導官に。

【GS=Government Section、GHQの「民政局」で日本側の公職追放や憲法草案等を担当（ホイットニー准将が長）…参謀第二部G2（ウイロビー少将が長）は保守派で吉田支持…第二次吉田内閣（四八年一〇月）の頃GHQ内ではG2が優勢になり、GSは劣勢になったと言われる。】

一九五〇年…研修所指導官として後進の指導に専念、「役所の仕事とは殆ど縁を切った生活」。

一九五〇年二月三十一日（一年を回顧）

この年は朝鮮動乱始め特記すべきことが多々あり、世界が第三次大戦に突入せんとする時代の一つの契機を画するものと思われた。勿論政治家や有識者は理性を以て破局を食い止めることは不可能ではないし、それが可能であることを切望する。読売新聞によれば本年のニュースは（中略）日共幹部の追放、警察予備隊発足、金閣寺焼失、追放解除、参議院選挙（略）。

一九五一年四月一日（マッカーサー元帥解任）…外相官邸で園遊会（中略）宴たけなわの最中解任の話が伝わり出した（中略）人々はあちらこちらにかたまってヒソヒソとこの話で持ち切りである（中略）青天の霹靂とはこのことであらう。

朝海浩一郎日記抄（二・完）（河野）

一九五一年四月二日今朝の新聞は「マ」元帥解職問題が大きく報道されている。「マ」元帥の日本第一主義がトルーマン大統領にも容れられなかったし、また、米の友邦殊に英国の憂慮するところであつたのであらう。講和条約調印を前にして「マ」元帥の解職は日本にとって手痛い（略）。

一九五一年四月ロンドンの日本政府在外事務所々々に内定。

一九五一年八月二七日羽田からロンドンへ赴任…經由地は沖繩、香港、バンコック、カルカッタ、カラチ、バスマ、カイロ、ローマ…二九日ロンドン着。

【日本政府在外事務所】は、日本との戦争状態の終結・日本の主権回復等を合意したサンフランシスコ講和条約（一九五一年九月八日署名）の発効（五二年四月二八日）に先立って米、英、仏などに設置されたもの。大使館のようなものではあるが主権国家として認められてない存在の在外窓口であるので、外交使節ではないし、外交特権はない。なお、当時の英国人の対日感情は極めて悪かった。】

一九五一年一〇月一九日【二人の英国軍人がロンドン在外事務所に来訪】

一人は戦争中大佐であり一人は准将であつた相だが態度がスティブでどうもおかしいと思つて居たところ次の通り語つた。

「貴下は最初の日本政府の代表として此の地をお客として訪問されたのでこんなことを言ふのは愉快ではないが自分等は戦時中、日軍の捕虜になり泰緬鐵道の建設に酷使せられた。自分の部下が非道の目に会うのをかばはんとして何回か暴虐行為を加へられた。その当時の将兵が尚此の西方地区に三万人は居りその七十五パーセントは未だに病院で手当を受けて居る。問題は桑港に於ける過早の平和条約の單なる調印に依つて解決されるものではない。英國人は日本人のこの行動を決して忘れぬであらうし又許さぬであらう。此の現實は貴下も直視され度い」といふのである。残虐行為を証明する部厚いアルバムも持参して二、三頁めくつて見せたが自分は手にはとらなかつた。

ただ、日本政府に申出の空気を傳達することを約して約三十分で会見は終つたがその態度はステイフではあつたが紳士的、帰りには兎も角握手はして別れた。

一九五一年一月二六日

午後から下院で対日条約の討議が行はれたので伊原君と傍聴した(中略)十数名の議員が討論を行ったが何れも日本の不正競争を激しく論難する人ばかりで日本との平和関係回復を喜ぶとの演説をした人は六時半頃テイーリング氏が出たのが始めてで同氏がこれを指摘して満場一寸ハッと忘れ物を思ひ出したようにシンとしたがそれから又、日本論難が続いた(中略)エリス・スミス氏の提案した対日条約六ヶ月棚上げ案は勿論圧倒

的に否決されたけれども、此の圧倒的票差は日本との平和関係回復を熱望する意思の表はれと見るよりは寧ろ已むを得ざる必然の条約をパスさせたといふだけの意味に解せらるべきであらう(中略)中国は依然として友好的空気の中でノスタルジックに思い出されて居り、モリソン氏の如き日本の國連加入を拒否すべしとの主張に対しこういふ主張は英國の中國國連加入要求支持を弱めるから反対であると論じていた。

もう午後の六時七時頃には聞きあきた unfair competition であらう沢山と云う気がした。

一九五一年一月二八日

下院では主として日本の競争といふ見地から問題がとり上げられたが上院では本条約が日本との平和を齎すといふ政治的観点から論議が行はれ又選挙区のことを心配せず嘗ての日英外交に活躍した政治家なり外交官なりが発言したため會議の空気は極めて友好的であり(中略) wishfully に日英同盟の昔を想起してゐた。

一九五一年二月三日【一年を回顧】

本年前半は研修所生活で何の変化もなくノンビリとやって居たが暫くして英國行が内定。(中略)八月末英國へ来てからベルグレーヴに【在英事務所】設営を略々に終るまでの四ヶ月はほんとに苦勞した。着英当初からクリスマス時分にやっとセ

トルダウンするだらうと見当をつけて置いていたがその通り。

一九五二年二月四日【ジョージ六世国王逝去】

午後諸般の状況に顧みてバックingham宮殿に参入警衛の警官にアンバサダーかと聞かれてエンバラスされたが兎も角も宮殿内に入って(中略)弔意を表しクラレンス・ハウスとマーボローハウスでも記帳をして置いた。

(注)『花みずきの庭にて』ある外交官の回想(岩波ブックサービセンター、一九八八年)、p.88によれば、朝海は、警官に「ジャパニーズ・アンバサダーか」と聞かれたので「アンバサダーではないが、リプリゼンタティブだ」と答えて弔問したという。

一九五二年四月二八日

平和条約発効の日・タイムズやガーデイアンに二段抜きで記事が出、両紙とも夫々社説を掲げたのは一寸意外であった。昨夜から今日にかけて新聞記者の電話がひっきりなしであった。午前九時、日章旗を掲げさせたら新聞社の写真班が出たり入ったりで久しぶりにガーデアンの言ふ様に今日は「日本デー」であった(中略)外務省差廻しの車で外務省はサー・ウィリアム・ストラング氏を訪ね吉田総理からイーデン外相宛のメッセージを伝達すると共に国交回復の挨拶を述べこれで外交関係回

復のフォーマリティーが終ってホッと一安心した。

一九五二年六月八日日曜、大使【松本俊一】着英。夜八時半頃エアポートに出迎へ。

一九五二年一月二二日【日英の経済摩擦の中心は紡績と陶器・英国の陶芸聯盟訪問】

十時半の会議の始まる前にアーヴィング氏の案内で同氏の経営する会社パラゴン陶器の陳列所を見た(中略)アーヴィング氏が英国製のティカップと日本の模造品を見せる。模造品は寸分違はぬ模様である。価格は三分の一だ相だ。嬉しくないマル・プラクティスである。

(注)前掲『花みずきの庭にて』p.94も参照。

一九五二年二月三二日【一年を回顧】

大きなことといえばキング・ジョージの急逝とこの途中に講和条約が発効したことであらう。自分等の生活も全く組織化されて新しい在外事務所は四月末に大使館となり自分がシャルヂェとなって暫らく事務をとり六月に松本大使を迎へた。

一九五三年三月六日【ソ連のスターリン死去】

スターリンは今晩一時晩か遂に死んだ 今日の新報は大変な見出しで大々的に報道して居る。自分は反響を本省に報告せね

ばならぬので十一時半スコット君を外務省に訪ねた。昼はセンビルさんと会食。午後は又五、六本電信を書いて大忙しであった。

一九五三年四月一七日【エリザベス二世女王の戴冠式に出席するため訪英する明仁皇太子殿下をニューヨークに出迎え】

七時少しすぎに島津君と共にセントラル・ステーションに向く。皇太子殿下出迎へのためである。七時五十五分の定刻にカナダから列車が入って来たので最後尾の車に伺候する。三谷侍従長や松井君とも挨拶を交わす。

一九五三年四月二七日【皇太子殿下を乗せた客船クイーン・メリーが英国サザンプトンに入港】奈良【靖彦】君【在英大使館書記官】が自室に訪ねて来て英国王室や政府の態度の冷淡さを嘆いて「日本へ帰りたくなつた」と利用価値のなくなつた小国日本の地位を慨嘆するのである。自分も昂奮した故か中々に寝つかれなかつた。

一九五三年四月二八日【臨時電車でロンドン・ウオータルー駅に到着された殿下のお出迎えについて】

ニューヨーク等では期せずして邦人の万歳が湧き上るのであるが英国の国柄と現在の日英関係が無意識に邦人にも反映したのかロンドンでは叫び声は揚がらなかった。ただ、たまりか

ねた在英の子供数名が用意の日章旗の小旗を無言乍らはげしく打ちふつたのに対し殿下も自動車に乗る前に特にそちらに對し片手を揚げて御会釈された。ロンドンで日章旗の小旗が振られたのは戦後初めてのことであらう。

一九五三年四月三〇日【チャーチル主催の午餐会】

一時ダウニング街十番で首相の午さん会あり。これは首相イーデンの会食であつたのがイーデン病氣となりその後誰か他の大臣がやるとのことであつたが恐らく輿論の一部が露骨な反日氣運を見せたのでそれを牽制する意味もあつてかチャーチルの招待に變つた。列席者は堂々たる顔ぶれ(中略)政府側及保守党の要人、日本縁故者は別として(イ)労働党からアトリー、チュター、イードが顔を出し(ロ)新聞界から反日紙の急先鋒ロード・ビーバールック外ロード・ロザミーヤ等が招待されて居たことにも言論界の空氣を緩和しようとする政府の意圖が伺はれた。(ハ)労働組合の代表的存在であるロード・シトリン、オーブライエン、チウソンの三人を含めてあつたことも意味は深長なりと看取された。

(中略)食後双方のトーストが終つてからこれは全く打合せ外のことであつたがチャーチルが約一〇分間即席の演説をした。

立上がつて約一分間発言せず満場を静まらせてから(イ)殿下は非常に幸福な青年で明るい前途を持つてゐる。(ロ)我々には意が違つたと随分はげしく争うが、国の利益といふことにな

れば一致するそして殿下を歓迎する。(ハ)殿下の滞英が興味あり且教育的であるべきことを切望する。英国人の *Way of Life* を学ばれたい。(ニ)英国と日本は君主を有して居るといふ点で共通のバンドを持ってゐる(中略)。(ハ)このテーブルに飾られた一對の青銅の馬の置物は自分の母が一八九四年日本から持ち帰って来たもので自分も愛好して居る。各国がこの様な美術品を制作し軍備に金を費はないですむ様になりたいたいものだ等々説き僅かこれだけのスピーチで殿下に対する敵意を表示した新聞が政府の真意を示して居らぬことを明らかにし青年に對する一応の訓示をも垂れ列席の日本側から今までの英国の空気に多少不快を感じて居たのを一挙に一掃したあたり その手際はこの人でなければやれぬことである。

(中略) この演説は簡単に朝海から殿下にも念のため通訳したが別室で次官補のスコットは朝海に對し、あの演説を殿下がお判りになったかどうかは実は要点でなくあの席にはあの演説を聞かせたい人が、一、三居たのだと内話した。

(中略) 【午餐会終了後】チャーチルは殿下と共に梯子段を降り乍ら「英国人は殿下の滞英がハッピーであることを希望してゐる。それと異なる様なお事が入っても *take no notice of it*」と何気なき相に付言することを忘れなかつたのである。

一九五三年六月二日【エリザベス女王戴冠式】

一九五三年六月九日【皇太子殿下ロンドン発】

一九五三年七月二九日〜八月二日【仏、伊、スイス、独等を休暇で訪問】

一九五三年八月一日

フランスの田舎は横道はペーヴしてないし家も汚いし人の服装もお粗末。英国では都会と田舎の相違がほとんどないのにフランスでは大分相違がある様である。

一九五三年八月四日

大陸【イタリア】のモータリストは余り道路のマナーはよくない。急に合図をせずに曲がったり停ったり割り込んで来たり税関の手前で急にスピードを出して抜いて検査の順位を早め様としたり バスを待避してやっても何等の挨拶もない。

一九五三年八月七日

ドイツに入ってから山は見へなくなり平野を飛ばす。英国よりも広漠。緑の牧野に黄色い麦畑のパッチがあるのが違ふ景色だ。道路は広いし立派であり敗戦国の臭いはない。

一九五三年八月九日

ケルンの荒廃は不変痛々しいものがあるがそれでも四年前

に來た當時に比し少くとも瓦礫は多少は取片付けられたし、新しい建物も駅付近に目立って建てられてゐた。

一九五三年九月【帰国命令、外務省経済局長に内定】

一九五三年一月三日【ロンドンで始まった日英支払い協定交渉の首席代表】

(注) 日本が一九五二年にIMF加盟、一九五五年にGATT加盟が認められるまで、日本は二国間交渉で差別的な輸入制限の問題などに対処するしかなかった。戦後間もない頃スターリング地域諸国との貿易は日本の貿易総額の約三〇%を占めており、日本は英国／英植民地圏への輸出を制限されるなどのため大幅入超でポンド不足であった。

一九五三年二月一七日

四時から(日英交渉の)第四回総会あり。アームストロングから、日本はス地域【スターリング地域】から二億三千万磅【ポンド】の輸入をすべきだと主張。(中略)自分は之に対し即座に反駁なり回答なりを約廿分に亘り行つて可なり緊張した会合であった。

一九五三年二月三〇日

英国から提案が出て來たが日本からの輸入に関する障害の緩和をイムプライするものであり且貿易のターゲットフィギュア【數値】も著しく現実的となつたので日本側一同大いに氣を良くした。提案の検討を約して散会。使命大半達成せりの感強く嬉しい。

一九五四年一月一日

午前中全権団員集つて打ち合わせ。

一九五四年一月二日

英側と会議。会議は順調に進行してゐる。

一九五四年一月六日

午後 英側と会議。一寸内容がもつれて腹が立った。

一九五四年一月八日

午後サーペル君が石油問題で來訪。この問題が会谈のスタンプリング・ブロックであったが今日の会谈でどうやら打開の途がついてホッとした氣持になる。

一九五四年一月十三日

午後、英側と会合。今日で大体しめくりがつき今週末あたり交渉妥結と考へて居たところサーペルは全く新しい提案を

出して来。今まで我方の主張した二二一でバランスのとれた輸入輸出といふことが危くなつて来た。自分も相当文句を云ひ personal faith を疑ふか疑はぬかといふきわどいところはまだ及んで今までの会合のうち最もビターなものであった。今晚は一晚中不愉快になつた。

一九五四年一月一六日

午前と夕方本省に対する請訓案を一同で會議して打合せ發電した。

一九五四年一月二〇日

トレヂュリーで會議。ほとんど日本から最終的な回答を出して局面は最終盤に近づいた。

一九五四年一月二三日

英側の求めにより會議。サーベルが東アフリカの輸入数字五を二・五に変更して来た。會談最終的段階のこの態度に自分は強硬に抗議した。本省に対しても全権団の立場がない。

一九五四年一月二六日

午後トレヂュリーで會議。英側が東アフリカの数字を修正したので対案は先方から出すべきだとは思つたが、かくては何時になつて會議が終るか見当も付かぬので自分から英本國のグレ

ー・コットン輸入を更に百万磅【ポンド】増額方要求した対案を出した。先方は考慮を約したがこれでまともらないと話は長くなる。全く飽き飽きして来た。

一九五四年一月二七日

日本側の要求を容れたものと仮定して事務的には話合がドン進められて居るから會議は終了の目処がついて来た。

一九五四年一月二八日

英側は最後まで石油問題でゴタゴタ述べ立てて居たが結局日本の案は全部そのまま呑んで二ヶ月に亘つた會議は此処に満足裡に終了。自分も全くホツとした。重荷を卸して嬉しい。

一九五四年一月二九日

午後三時半に今度の會議を開催した場所であるトレヂュリーのボードルームで調印式あり。

一九五四年一月三〇日

今日の新聞は昨日の取極の報道で賑はつて居り、タイムス、ガーディアン、テレグラフ等何れも社説を掲げて居る。マンチエスター、ストック方面【綿製品、陶器の産地】では反対の声明書も發出されたが一流紙の論調は概ね政府の立場に賛意を表しタイムスもイギリス産業が競争力を持てば日本の競争を気に

病む必要なしとしてゐる。

一九五四年二月一日

新聞は不相変一流紙を除いては日英取極を Back Part なりとして書き立てて居る。エクस्पレスの如きは最近の寒さをモジって(中略)例によって齒をむき出した日本人が職業紹介所に列を作つて居る英国人失業者にスカーフを売り付けようとして居り傍のセン維工場は閉鎖されて居る漫画を載せてゐる。

一九五四年四月四日【ロンドン離任】

一九五四年一〇月五日【岡崎勝男外相に同行して南米出張】

一九五四年一〇月二日【ロンドンで訪欧中の吉田茂総理一行と合流】

一九五四年一〇月二六日【ロンドンでの吉田総理の上下両院議員との懇談会】

午後は四時から議会の委員室でインター・パリーメンタリー・ユニオンで上下両議員に対する総理の話あり。約廿分原稿に基いて話す。この内容は自分等は余り賛成でなかつた。何となれば日英同盟を想起しつつ共産主義の脅威に対して日英連携して相当らうといふ内容を主眼とするもので共産主義に対する観方を米國とは全く異にする英国なので余りにも実状に即しな

いと思はれた。然し、これは総理の話の中心なので余り手を入れるわけに行かなかつた。話声は低声であり余り冴えず。最初の十分位はほとんど何を言つて居るのか判らなかつた。演説中「日本軍の捕虜となつて虐待を受けた捕虜云々」のくだりで「ヒアヒア」と歓声が起り前途の暗澹さを思はせたが果然質問の時間に入り、労働党の議員が主として日本の労働条件の劣悪、共産主義がこわいのなら何故に労働条件を改善せぬのか。日本の紡績はひどい条件下で仕事をして居る(サマスキル)、何時捕虜救恤の問題を片づけるのか等々攻撃的な質問が十二、三出て来た。

これに対し総理は通訳の自分のみ低声で喋るのみでその間議場は私語が多くダレ切つてしまふし答辯も余り冴えないので恐らく多くの議員は失望したらうし又ステュピッドであると思つたかも知れぬ。然しこの間テイーリングやリズデル等の議員は全く口をかんして居た。十の中一つ位はもう少し政治面から或は経済面からさへも日本に対し理解のある言論をして総理に若干の敬意を払つてもよかつたのではあるまいかと思はれた。

(注) このときの模様を朝海は、「吉田さんの日英協力論とは似ても似つかぬ攻撃的、批判的質問が十分近くも飛び出してきた」と回顧している。前掲『花みずきの庭にて』p.101。

一九五四年一〇月二七日【吉田総理のイーデン外相との会談】

午後十時半総理に随行して外務省に行く。イーデン外相との会見あり先方はイーデンの外レディングとアレン、当方は大使と自分。約四十分位会談があったが当面の日英問題であるけれどもイーデンは成程調子は良いが下僚の書いた紙を読んで居る程度である。経済問題には触れず、日本の人口や領土の大きさを聞いてビックリして居る程度であるから情けないものである。一応両者の会談が終わった時分にバトラー、ソーニクロフト、ボイド、カーペンターといふ連中が参加し、ガットや不正競争問題や船舶問題を論じたので少し活気づいた。

(中略) 八時十五分から首相官邸でチャーチルの招宴あり。(中略) チャーチルは態々、席を立てて自分達にまで握手する努め様。七十九才とか。食事後起って「吉田氏は日本では中々タフな人間だと聞いたが外国では中々愛嬌のある人だ」と冒頭して日英同盟まで回顧して話したので吉田さんも大喜びの態であった。

(注) 朝海は、このときのチャーチルの挨拶を評し、「吉田さんの不快をコロリと親英に逆戻りさせた」と回顧している。前掲『花みずぎの庭にて』、p.102。

一九五四年一月二日【総理に同行するため英国発、米国へ】

一九五四年一月四日【ニューヨークのフォリン・アフエア

朝海浩一郎日記抄(二・完)(河野)

ズ・カウンシル主催の晩餐会】

食事後、総理から二十分ばかり講演あり。講演後聴衆(六、七十名で新聞人、財界人の名士らしい)から二、三質問が出たが何れも好意的で禮儀を尽したものであり、総理退席の際など立ち上って皆熱心に拍手を送ってゐたことは英国議会の空気とは正反対であった。

一九五四年一月五日【ニューヨークのジャパン・ソサエティ主催の総理歓迎レセプション】

千人以上は出席して居たであらう。而もこの人々が二十弗の会費を出して来て居るのであるから米国の対日関心が英国のそれとは比較にならぬことが痛感せられた。

一九五四年一月七日【日本に帰着(総理と共にワシントン、サンフランシスコ、ホノルル、ウエーキ島経由)】

一九五四年二月三一日【一年を回顧】

一月の日英会談が成功裡に妥結したことは嬉しかった。(中略) 四月早々日本で家族とレユニオンした。久しぶりの日本勤務である。(中略) 十月予ての計画の通り岡崎外相に随行して南米へ旅行したが始めて見る国として此の旅行は楽しかった。吉田首相の外遊に関連し最後の瞬間に英国へ出張を命ぜられ十日程英国に滞在したのも面白かったし仕事を愉快にやっていた。

帰国後政変あり重光外相となつたが、これは全くの側近外交。

本省の幹部はすっかり棚上げ。余り愉快でなくなつた。

(中略) なほ読売新聞は昭和二十九年の重大ニュースとして左の通り発表した。

- (一) 洞爺丸の遭難
- (二) ビキニ被災
- (三) 陸運造船保全汚職
- (四) 乱闘国会
- (五) 近江絹糸争議
- (六) 二重橋事件
- (七) 吉田首相外遊
- (八) 相模湖の惨事
- (九) 吉田内閣去り鳩山内閣成立
- (一〇) 李徳全ら来訪